

国立国語研究所学術情報リポジトリ

隠岐の島都万方言における動詞の活用： 活用形の整理と用例の提示

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002490

隠岐の島都万方言における動詞の活用 —活用形の整理と用例の提示—

平子 達也*

1 はじめに

本稿は、隠岐の島都万集落（旧隠岐郡都万村）の方言（以下「都万方言」とする）における動詞の活用について、今後の詳細な分析に向けて、これまでに得られたデータを整理するとともに、各活用形の用例を提示するものである。用例は、2016年11月に行われた国立国語研究所の合同調査（以下「本調査」とする）とその後の筆者自身の調査で得られたものである。

本稿では、用例を示す際、カタカナ表記を用いる。「セ」「ゼ」で表記するものは、しばしばその子音が口蓋化し [se] [ze] で現れる。ただし、口蓋化の度合いには揺れがあり、[se] [ze] で現れることもある。「ケァー」「メァー」などと表記するものは、概略 [kɛ: ~ kæ:] [mɛ: ~ mæ:] という音声を表わす。この[ɛ ~ æ]の母音は長母音でしか現れず、[e]と対立する。なお、理解の便の為に（1）のような音素表記も一部用いる。この音素表記は、筆者による暫定的なものである。

（1）音素表記

母音 i[i ~ i̯], u[u], e, o[o], a, ɛ[ɛ ~ æ]

子音 p, b; t, d; c[ts ~ tɕ], z[dz ~ dʒ]; s[s ~ ɕ]; k, g; h[h ~ ç ~ φ]; m, n; r, w, j; N（撥音）; Q（促音）

2 本稿における用語法

本稿では、種々の用語法などについて小西（2017）に従う。小西（2017）の方針は、「高度に専門的な言語学・日本語学の知識を要せずとも理解・使用できるような記述法を目指す」というものである（小西 2017: 1）。この方針は、調査協力者など一般の方々をも対象にするという本報告書の性質に鑑みたとき、本稿を執筆する際にも取るべき方針であると考えている。

2. 1 活用と活用形

活用と活用形とを、以下のように定義する（小西 2017: 1）。

活用 述語が統語的機能や文法的意味に応じて形を変えること。語彙的意味を担う単語それ自体が語形変化をする場合のほか、単語に他の語（付属語や補助用言）が接続する場合を含む。

活用形 一つの語彙的意味と、一つ以上の文法的意味を表わし、自立する形

* 駒澤大学文学部 講師

2. 2 自立語・付属語と語幹・接辞

自立語と付属語を以下のように規定する(同)。

自立語 単独で自立しうる最小の形式。名詞・動詞・形容詞などの品詞が含まれる。共通語では名詞「ヤマ(山)」、「ガクセー(学生)」、動詞「カク(書く)」、「ミル(見る)」、形容詞「アカイ(赤い)」、「ナイ(無い)」など。

付属語 単独では自立して用いにくい、自立形式に付いて、文中での統語的機能・文法的意味を示す語。語形変化のない「助詞」と語形変化のある「助動詞」に分けられる。共通語では、「ヤマ(山)ガ」の「ガ」、「ヤマダ。」の「ダ」、「カク(書)ダロー。」の「ダロー」など。

なお、「付属語」は、学校文法におけるそれよりも狭義のもので、複数の品詞やテンス(時制)にわたる自立形式に付くことを必要条件とする。例えば動詞「書く」の否定形「カカナイ」の「ナイ」は、「カカ」が非自立形式である故に「付属語」とは認められない。この「ナイ」のように、語を構成する文法的な形態素を**接辞**と呼ぶ(小西 2017: 2)。また、音素を単位として抽出できる、活用形の不変化部分を**語幹**と呼ぶこととする(小西 2017: 6)。例えば、共通語の「書く」は{kak}、「見る」は{mi}、「来る」は{k}、「する」は{s}を語幹とする。

3 調査票について

本調査及び筆者自身の調査で用いた調査票(以下、本調査票)は、本土方言の用言(動詞・形容詞・形容名詞=学校文法で言う「形容動詞」)の活用(特に動詞の活用)を、ある程度体系的に把握するために、必要最低限と思われるものを調べることを目的として、筆者が作成したものである¹。活用の型、および、主要な活用形とそこに現れる形態音韻論的現象の把握・記述に重点を置くものであり、意味と形式の関わり、それぞれの活用形の用法などについての調査を目的としたものではない。

調査項目は、以下のカテゴリー1~4に分けられる。現段階ではカテゴリー1とカテゴリー2の一部までしか調査を終えられていない。

カテゴリー1

古典語の各動詞活用型1語以上について、基本的な活用形をそろえること、つまり「形式の洗い出し」を優先する。なお、調査項目に含めた活用形の種類は、以下に示した小西(2017: 2-4)にあるものの中から「尊敬」など一部を省いたものである。

終止するタイプ [終止類] それ自体で述語として文を終止する形。

(断定非過去・断定過去・命令・禁止・意志・推量)

接続するタイプ [接続類] 連体・連用修飾の節・句をつくる形。

¹ 調査票を作成するにあたり、友定賢治先生、小西いずみ先生に多大なるご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

(連体非過去・連体過去・中止・仮定)

派生語をつくるタイプ [派生類] もとの語・述語句に文法的意味を付し、活用する述語句、または、他の品詞に属する語を新たに派生する形。

(否定・とりたて否定・丁寧・使役・受身・可能・尊敬・継続・希望・のだ)

カテゴリー2

基本的な子音語幹動詞について、タ形／テ形に見られる音便形式などを中心とした形態音韻交替現象を見る。カテゴリー2は汎方言的にある程度使える調査項目だと考えているが、方言によっては一部修正・追加が必要かと思われる。

カテゴリー3

当該方言において標準語とは異なる活用をするものなどを中心として項目を決定した。方言毎に変更を加える必要がある。

カテゴリー4

各方言で特徴的な形が出るとも思われないが、活用体系を把握するうえで、調査しておけば、記述としては役立つであろう項目。例えば、丁寧形と動詞否定形（母音語幹動詞）など。

3 動詞活用形の整理

ここまでの調査で得られたデータを整理し、表の形で示す。括弧で示したのは、予測されるが現段階で筆者が、少なくともそのままの形では確認をしていない形式である。

表1 動詞活用形

		書く	死ぬ	開ける／起きる	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	シノル	アケル／オキル	クル	スル
	断定過去	クァータ [ke:ta]	シンダ	アケタ／オキタ	キタ	シタ
	命令	カケ	シネ	アケー／オキー	コイ	セー
	禁止	カクナ	シノルナ	アケルナ／オキル ナ	クルナ	スルナ
	意志	カカー	シナー	アキョー／オキョ ー	コー	ショー
	推量	カカー カクチャラー	シナー シノルチャラー	アキョー／オキョ ー アケルチャラー ／オキルチャ ー	(コー) クルチャラー	ショー スルチャラー
接 続 類	連体非過去	カク	シノー	アケル／オキル	クー	スル
	中止	クァーテ [ke:te]	シンデ	アケテ／オキテ	キテ	シテ
	仮定	カキヤ	シニヤ	アケリヤ／オキリ ヤ	クリヤ	スリヤ
派 生 類	否定	カカノ	シナノ	アケノ／オキノ	コノ	(セノ)
		カカン	シナン	アケン／オキン	コン	セン
	とりたて否定	カカセノ	シニヤセノ	(アケリヤセン)	(クリヤセノ)	(スリヤノ)

	カカセン	シニャセン	/オキリャセン	クリャセン	スリャセン
使役	カカスル	シナセル	(アケサスル)	キサセル	サスル
		シナス	/オキサスル		
受身	(カカレル)	シナレル	(アケラレル)	クラエル	(スラレル)
			/オキラレル		
可能	カケル	シナレル	アケラエル	クラエル	—
			/オキラエル		
継続	ケァーチョル	シンヂョル	アケチョル	キチョル	シチョル
	[kɛ:teoru]		/オキチョル		

規則的な活用をするものとして、子音語幹動詞と母音語幹動詞とがある。子音語幹動詞は「書く」「居る」など学校文法で言う五段活用動詞に相当し、語幹が子音で終わる。母音語幹動詞は「見る」「起きる」「開ける」など（口語文法の）上一段・下一段活用動詞に相当するもので、語幹が母音で終わる。その母音は、i（上一段）またはe（下一段）である。

子音語幹動詞の語幹末子音には、k（カ行）、g（ガ行）、s（サ行）、t（タ行）、b（バ行）、m（マ行）、r（ラ行）、w（ワ行）がある。語例は、表2を参照。

子音語幹動詞のうち、語幹末がn（ナ行）の「シノル（シヌルとも）」（死ぬ）はやや特殊である。「書く」などを子音語幹動詞一般型とするのに対し、「シノル」を同特殊型とする。

「シノル」は、否定形シナン、仮定形シニャなど、一般型と同じ活用形となる部分も多いが、その中であって断定非過去形・連体非過去形シノルや禁止のシノルナは例外的な形である。これは、古典語のナ行変格活用の特徴を引き継ぐ形式であると考えられる。未調査だが、「イノル」（去）も子音語幹特殊型として存在する可能性はある。

また、不規則な活用をする動詞として、「クル」（来る）と「スル」（為る）がある。

表2 子音語幹動詞の音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書 kaku	ケァータ	kをiにする。さらに母音が融合する。但し「行く」ikuは例外（本文参照）。
g	漕 kogu	ケータ	gをiにする。さらに母音が融合する。-タが-ダになる。
s	出 dasu	デアータ	sをiにする。さらに母音が融合する。
t/c	立 tacu	タッタ	t/cをQ（促音）にする。
n	死 sinoru	シンダ	nをN（撥音）にする。-タが-ダになる。
b	飛 tobu	トンダ	bをN（撥音）にする。-タが-ダになる。
m	飲 nomu	ノンダ	mをN（撥音）にする。-タが-ダになる。
r	切 kiru	キッタ	rをQ（促音）にする。
w/∅	買 ka(w)u	カッタ	wをQ（促音）にする。

4 各活用形の用例

以下、各活用形の用例の一部を提示し、必要がある部分には若干の説明を加える。当該の形式の部分には下線を付す。また、上記の表中に組み入れなかった諸形式についても簡単に触れる。

4. 1 断定非過去

- (2) ワタシモ カクワ 「私も書くよ」
(3) ノキーデ マド アケルワ 「暑いから窓を開けるよ」
(4) バイキンワ ネットデ {シノル/シヌル} 「ばい菌は熱で死ぬ」

しばしば「ダ」「ワ(ナ)」のような付属語が後続する。「ル」で終わる断定非過去形に付属語が後続する際には、[kiruda ~ kirda ~ kilda] のように実現し、[kidda]/kiQda/のように実現しない。[kidda]/kiQda/のような促音形は、話者によっては許容されないこともある。

4. 2 断定過去

- (5) キョネンモ ケアータ 「去年も(年賀状を)書いた」
(6) ムカシワ ヨー フネ ケーダ 「昔はよく船を漕いだ」
(7) ゴキブリ タテアータラ チキ シンダ 「ごきぶりを叩いたら、すぐに死んだ」
(8) アッチャ マー アケタワ 「あっち(の窓)はもう開けたよ」
(9) キノーモ イキタ 「昨日も(神社に)行った」

子音語幹動詞は、この形式の時、音便形をとる(表2)。注意したいのは、標準語では同じカ行イ音便となる「書く」「漕ぐ」でも、前者は「ケアータ」[ke:ta ~ kæ:ta]、後者は「ケーダ」[ke:da]と、その音便形における母音が異なることである。これは、前者が ai という母音連続に由来するのに対し、後者は oi という母音連続に由来することによるものと考えられる。

また、「行く」は「書く」と同じ k 語幹動詞ではあるが、音便形をとらず「イキタ」となる。このような「行く」の特殊な活用は、出雲方言とも通ずるところである。

4. 3 命令

- (10) マズ センセニ ケアーテ ソイカラ トモダチニ カケ
「まず先生に(手紙を)書いて、それから友達に書け」
(11) ワシガ モドッテ クルマデ ココニ {オйна/オイ}
「私が帰ってくるまで、ここにいろ」
(12) ソノ マド アケーナ 「その窓を開けろ」
(13) シゴト セーヨ 「仕事をしろよ」

「ナ」「ヨ」などの終助詞が続くことがある。r 語幹動詞「オル」(居る)の命令形は「オレ」ではなく「オイ」であるのは注意をひく(11)。標準語の指示詞「それ」に対応する形式が、この方言で「ソイ」であることと並行的な現象とも考えられる。ただし、「乗れ」が「ノイ」になるかどうかなどは未確認。あるいは「オル」の命令形に限られた現象かもしれない。

4. 4 禁止

- (14) ソゲナ トケ カクナ 「そんなところに書くな」
(15) マダ シノルナヨ 「まだ死ぬな」
(16) アケルナヨ 「(その窓は)開けるなよ」

(17) シゴト スルナ 「仕事をするな」

表面的には断定非過去形に「ナ」がついた形である。(15)「シノル」や(17)「スル」のように断定非過去形が「ル」で終わる動詞の場合、その命令形は、「シノンナ」「スンナ」のような「ル」が撥音と交替した形になることはなく、[suruna ~ surna ~ sulna]という発音で実現する。4. 1で指摘した、断定非過去形に付属語が続いた場合の現象とも関連することであろう。

4. 5 意志（・勧誘）

- (18) ワシモ カカーカナ 「私も書こうかな」
 (19) イッショニ カカーヤ 「一緒に書こうよ」
 (20) アキョーカイ 「(こっちの窓は私が) 開けようか」
 (21) アキョーヤ 「(一緒に) 開けよう」
 (22) ソロソロ シゴト ショー (カナ) 「そろそろ仕事をしよう (かな)」
 (23) イッショニ シゴト ショーヤノー 「一緒に仕事をしようよ」
 (24) マタ コーヤ 「また (一緒に) 来ようよ」

意志を表す場合には、意志形がそのまま用いられるか、「カナ」「カイ」などの終助詞が続く。意志形と同形ではあるが、「ヤ(ノー)」という終助詞が続くと勧誘の意味となる。

4. 6 推量

- (24) ラントノ バーサンワ コトシモ ネンガヂョー {カカーワナ/カクヂャラーナー} 「うちのおばさんは、今年も年賀状を書くだろう」
 (25) キタノ マドワ ハナコガ {アキョーワナ/アケルヂャラー} 「北の窓は花子が開けるだろう」
 (26) マー ソロソロ クルヂャラーノ 「もうそろそろ来るだろう」

意志形と同じ形に「ワナ」という終助詞が続くと推量の意味になる。意志形と同形のものが単独でも推量の意味となるかは未確認。また、断定非過去の形に「ヂャラー」が続いても推量の意味になる。このとき、断定非過去の形が「ル」で終わる動詞は [akerudzara: ~ akerdzara:] となり、「アケッヂャラー」のように「ル」が促音と交替した形にはならない。4. 1や4. 4も参照。

4. 7 連体非過去

- (27) シノル トキワ イッショニ シナーヤノ 「死ぬときは一緒に死のう」
 (28) ココノ カギ アケル ヤツガ ミエンダガノ 「ここの鍵をあけるものがない」
 (29) シゴト スル トキニヤ テレビ ケシャ エーダガノ 「仕事をするときはテレビを消せばよい」

4. 8 中止

- (30) マズ センセニ ケアーテ ソイカラ トモダチニ カケ 「まず先生に(手紙を)書いて、それから友達に書け」(=10)

- (31) マド アケテ イレカエヨーヤ 「窓を開けて（空気を）入れ換えよう」
(32) コッチ キテ イッショニ クワヤノ 「こっちに来て、一緒に食べよう」

子音語幹動詞において、音便形が生じること、断定過去の場合と同じである。

4.9 假定

- (33) コイツニ カキヤ イーワ 「これに書けば良いよ」
(34) ココ アケリヤ スズシカラージュ 「ここを開ければ涼しいだろう」
(35) コッチエ クリヤ イーモノガ ミラレルケ
「こっちへ来ればいいものが見られるよ」

「書いたら」に相当する「ケアータラ」などの形式が用いられる場合もある。

4.10 否定

- (36) キョーワ {カカノゾ/カカンゾ} 「今日は書かないぞ」
(37) コノ マド アンマリ アケノワ 「この窓はあまり開けない」
(38) マダ {コノダガノ/コンダガノ} 「まだ来ないね」

「カカン」など「ン」形も頻繁に使われるが、「カカノ」など「ノ」形が伝統的な形式だという意識が話者にもあるようである。なお、否定に関わる他の表現には、以下のようなものがあった。

- (39) カカザッターワ 「(去年は年賀状を) 書かなかった」(否定過去)
(40) アイツ マタ {カキメアーナー/カカンヂャラー}
「あいつはまた書かないだろう」(否定推量)
(41) シマ カカニヤ カクトキ アリヤセノワ
「今書かないと、書く時はないよ」(否定条件)
(42) アノ ヒトニ カカーデモ… 「あの人には書かなくても・・・」(否定逆接)
(43) ラントノ コワ ナカナカ ハヤ オキーデ コマッコルガノ
「うちの子はなかなか早く起きなくて困る」(否定中止)
(44) シゴト {シメアー/シメアーヂャラー}
「(なかなか言うこと聞かないから) 仕事をしないだろう」(否定推量)
(45) {コンヂャラー/コノヂャラー/キメアーワノ}
「(今日はおそらく) 来ないだろう」(否定推量)

4.11 とりたて否定

- (46) アイツワ ナンボ イッタテテ テガミ カカセノ
「あいつはどれだけ言っても手紙を書かない」
(47) ナカナカ オキラセノ 「(大声を出しても) なかなか起きはしない」
(48) フトツツダエ クリヤセン 「(お客さんが) 全然来はしない」

上の否定形とは別に、「カカセノ／カカセン」など形の上では「とりたて否定」にあたる形式がある。特に事柄の成立について強く否定する際に頻繁に見られるが、一般の否定形と交替可能な場合もある。

また、必ずしもこれらの形と交替可能なわけではないが、形の面では意志形に「ツケ」という形式がついた形が強い否定の意味で使われることがある。この形は、誰かに「～せよ」と命令されたのに対して、「～するものか！」と反論するような場面で使うことが多いようである。

(49) イマカラ ニョーツケ 「今から(なんて)寝るものか！」

(50) ゼニヤ ナンヤ {アラーツケナ／アラセノワ}
「(そんなところを探しても) お金なんてありはしない！」

4. 1.2 使役

(51) ドガゾシテ アイツニ カカスルケ 「どうにかしてあいつに(手紙を)書かせる」

(52) イヌオ {シナセル／シナス} 「犬を死なせる」

(53) スキナ トキニ オキサスル 「(子どもじゃないんだから)好きな時に起きさせる」

(54) スキナヤーニ キサセルノワ スカンダガノ 「好きなように来させるのは嫌だよ」

(55) (宿題を) サスルノモ ホント コタエルヂヤ
「(子どもに宿題を) させるのも本当に苦勞する」

子音語幹動詞には-*asuru*、母音語幹動詞には-*sasuru* という接辞が接続すると分析できそうだが、「ネサセル(寝させる)」という形も現れた。また、(52)の「シナス」も問題である。この「シナス」は古典語の助動詞「ス」「サス」が下二段活用であったことの名残である可能性もあるが、十分な調査はできていない。また、「来る」の使役形「キサセル」は、後述の受身形とともに注意をひく形式である。

4. 1.3 受身

(56) コゲナ コメアー ズデ カカレテモ コマルワ
「こんな小さな字で書かれても困る」

(57) カギ シメタニ ドロボーニ アケラエタ 「鍵を閉めたのに泥棒に開けられた」

(58) カッテニ クラレテモ コマルワ 「勝手に来られても困る」

(59) サキニ スラエタケ・・・ 「先に(仕事を)されたので(私のすることがない)」

接辞部分の-*r*が脱落した「アケラエタ」のような形もあれば、脱落していない「カカレテ」のような形もある。今のところ、両者は音声的な揺れと見ている。やはり、ここでも目立つのは「来る」の受身形「クラレテ」である。標準語では、「来る」の使役形と受身形とで、語幹 *k-* に続く母音は同じである (*k-o-saseru* と *k-o-rareru*)。その一方で、都万方言では使役形「キサセル」に対して受身形「クラレ(ル)」と、語幹 *k-* に続く母音が異なるというのは、興味深い。島前も含めた隠岐の他方言との比較などが必要であろう。

4. 14 可能

- (60) アノコワ カケルワノ 「あの子は(難しい字を)書ける」
(61) コノ マドワ ワケナシニ アケラエルワ 「この窓は簡単に開けられる」
(62) アシタモ ゼカンガ アルケ クラエルワナ 「明日も時間があるから来られる」

受身の場合と同じ形式が使われ、やはり、接辞部分の-rが脱落した形も脱落していない形もある。子音語幹動詞の場合、可能動詞形と思しき「カケル」が使われるが、「カカレル」という形式も確認された。

なお、今のところ、潜在可能と能力可能の区別などは確認されていない。

4. 15 継続

- (63) イマ バーサンニ テガミ ケァーチョルトコダケ 「今おばーさんに手紙を書いているところだ」
(64) マド アケチョルトコダ 「窓を開けているところだ」
(65) マー キチョルチョワ 「もう来ているだろう」

結果継続・動作継続の区別などは確認されていない。子音語幹動詞は音便形をとる。

5 おわりに

分析も調査もなお不十分である。また、筆者の個人的な理由により、本稿を執筆するにあたって十分にデータを精査する時間がとられなかったことは慚愧に堪えない。詳細かつ網羅的な調査を行った末に、形容詞や形容名詞なども含めた、本方言の形態(音韻)論に関する本格的な記述を提示したいと考えている。本稿を礎とし、今後のさらなる調査・研究を期するものである。

参考文献

- 小西いずみ(2017)「この報告書における記述の枠組み」『全国方言文法辞典資料集(3)活用体系(2)』pp. 1-12